

明恵上人の最期

高山寺における明恵上人の活動は、多くの人々の信望を集めたようで、説戒の際には上人を慕う群衆が集まり、説法ができないほどであったと言われています。上人に高山寺の土地を与えた後鳥羽上皇は、鎌倉幕府を倒すために挙兵し、承久3年（1221年）に承久の乱が起こります。乱は幕府側の勝利で終わりますが、上人は高山寺に逃れてきた上皇側の兵士をかくまっただとして捕らえられ、連行先の六波羅（京都市）で北条泰時と面談します。泰時は、仏の慈悲を説く上人の毅然とした態度に心服し、以後は上人に深く帰依したようで、和歌や手紙のやり取りなども行っています。その内容からは、泰時が明恵上人を深く敬慕していたことが伝わってきます。



施無畏寺

寛喜3年（1231）、湯浅景基は、若き明恵上人が修行した白上峰の麓に堂を建て、施無畏寺（湯浅町）を創建します。その開山供養に招かれたのが、故郷を訪れた最後になりました。その頃から体調を崩していた明恵上人は、寛喜4年（1232年）1月19日巳刻（午前10時ごろ）、60歳でその生涯を終えました。死を悟った上人は、「今日が命の終わるときである」と弟子たちに伝え、釈迦が入滅したときと同じように、右脇を下にして横たわります。「南無弥勒菩薩」と数回唱え、「我、戒を護る中より来る」とつぶやき、微笑みをたたえて亡くなったと記録されています。上人が亡くなる前日の夕方からは、異香（優れた良い香り）が漂い、葬儀の後も数日間消えなかったと伝えられています。

明恵上人が亡くなった後、弟子たちは上人の功績を後世に伝えようと、さまざまな顕彰活動を行いました。一番弟子の喜海は、伝記を著わし、高山寺や故郷の有田地方における上人ゆかりの地に卒塔婆を建立して遺跡となし、その存在を永久に残そうと努力しました。弟子たちの活動により、死後およそ800年が経った現在も明恵上人の功績は各地で語り継がれています。上人生誕の町である有田川町でも、引き続き上人を後世へと伝えていきたいものです。



明恵上人御廟（高山寺）